小林よしたか(義孝)の自己紹介　2013/09/1 現在

生まれ

1943(昭和 18)年 1 月 24 日

家族

妻・1 女･2 男　子どもはそれぞれ結婚・独立し、妻と２人暮らし。５月、多分最後となる８人目の孫が生まれた。

現役職

都留市議会議員

後期高齢者医療広域連合議会議員

山梨県東部広域連合議会議員

桂川流水利用特別委員会委員長

都留市環境審議会会長

国民健康保険運営協議会委員

その他

趣味

ホームページ立ち上げた（７年前）当時の自己紹介には「野鳥や野草観察・ときどき山歩き・国語辞書集め・年がいもなくバイク」とありました。最近、山歩きはほとんどなくなり、バイクも時々動かす程度で行動的でなくなっていることに気が付きます。暇があればわが家のまわりの空き地に生えている花の観察と娘から委託されている緋メダカの観察です。時々、お城山にのぼり体調を整えます。これは特効があると人に言うのですが、誰も信じないようです。写真は趣味というよりも生活の一部になっています。

辞書の話

国語辞書が好きで、いろいろな辞書を見ては楽しんでいる。といっても「日本国語大辞典第２版」や「大言海」、その他の辞書は本棚の肥やしで手元に置いて使っているのは「大辭典」と「広辞苑第６版」「新明解国語辞典第７版」「岩波国語辞典第７版新版」などです。

「大辭典」はこの７年間で「日本の古本屋」から２回購入しました。縮刷復刻盤で全 13 巻です。最初に購入したのはずいぶん使い込んだ、まさに古本で、折れたページや破れた函の修理にかなりの手間が必要でした。これは１万円。ところが、その２年ほど後、やはり「日本の古本屋」から 3，000 円で売り出されているのを見つけました。「あっ、これは新品だ」と直感し、直ちに購入しました。当り。使い込んだものが１万円で新品同様のものが３千円、送料を含めて 4,300 円、古書購入の妙みたいなものですが、手放す人の立場の違いが見えてくるような気がします。

ちなみに、「大辭典」は昭和９年から 11 年に 26 巻で出版され、昭和 28 年から 29 年に 13 冊で復刻出版されました。私が手に入れたものはもちろん復刻盤。一冊目の第 1・2 巻は昭和 28 年 4 月 10 日発行で、奥付を見ると定価 1,200 円で都内予約特価 1,000 円、地方予約特価 1,035 円とあります。13 冊目の第 25・26 巻は昭和 29 年 2 月 28 日発行で

定価 1,200 予約特価 1,000 円。この辞書には谷村町が載っています。

ヤムラ　谷村町　山梨縣南都留郡の東北部。舊郡内地方の中心で機業隆盛。城址あり勝山城といふ。私線富士山麓電気鉄道の谷村町・谷村横町の二駅を置く。人口約 9,300。

「新明解国語辞典」は「岩波国語辞典」と比べて楽しんでいます。語の解釈で「岩波」の方が厳密を期しているかと感じたことがあるからです。しかし、その例は思い出せません。最近、楽しいことがありました。「新明解」に間違いを見つけたのです。漢字を確認しようと思って開いたのは「寸胴」で、間違いはその訳にありました。

ずんどう 0　一「ずんど切り」の略。二―な　途中で**くたびれたり**することなく上から下まで一様に太い状態。「―な体型／―鍋」　表記　一般に「寸胴」と書く。

当然、「くたびれる」でなく「くびれる」ですね。

三省堂に電話をしたら大変喜ばれましたが、それだけでした。以前に「広辞苑第５版」に段差ができて使いにくいので「修理できるか」と電話で聞いたら「５年くらいで段差ができるはずのものではない」と新しいのを送ってくれました。この伝で言えば「訂正したものができたら送りたい」くらいの反応があってもよいように思いますが、住所も聞かれなかったので、それはありません。出版社のプライドの違いでしょうか。しかし、手元に「新明解国語辞典第７版」がある限り、その間違いと私が指摘した事実は消えません。

「赤旗」に国立国語研究所名誉所員の佐藤亮一さんが方言について連載されたのを機に方言関係の辞書も何冊か入手しました。そのなかで楽しみなのは「方言地図」です。これも「日本の古本屋」で見つけたものですが、段ボールの函に入り新品状態で６巻揃っているものが手に入りました。都留大の図書館でもＢ４版に縮刷したものしかないのに、こちらは原版です。第３集の奥付をみると昭和 44 年３月発行です。定価 8,000 円　編者国立国語研究所発行大蔵省印刷局です。第１集は 7,000 円で第６集は 10,000 円です。それが６冊で、たしか２万円でした。なぜ、こんなに安いのか、「大辭典」との比較で考えても分かりません。方言が研究や趣味の対象から外れているのでしょうか。

私としては、将来、何冊かある方言辞典や参考書を横に置いてこの「方言地図」を開き、言葉遊びをする日が来るかどうかが一つの関心事です。

フェイスブックの話

今年７月６日からフェイスブックを始めました。参院選で共産党はＳＮＳ（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）を活用したのですが、私の場合はとても間に合わず、いまだ手探り状態です。2000（平成 12）年１月 24 日、57 歳の誕生日から３年日記をつけ始めましたが、日記が叙事的なのにたいしてフェイスブックは私の場合かなり抒情的です。「友達」の多くが理論家ですが、私はそんな能力はありませんので、花の写真を中心に投稿しています。一部の人が「きれい」と言ってくれるのが励みです。

「週に一度の手紙」は間もなく 1200 号、23 年になります。ホームページに載せる前のものはワープロのフロッピーに入っていますが、日の目を見ることはないでしょう。